医史学と私

山中太木

日本医史学雑誌第三十五巻第三号
平成元年七月三十日発行

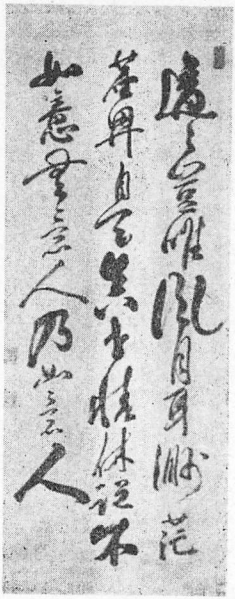
医史学と私の因縁は、昭和三年に私が医学の道を歩みはじめた学生の頃、恩師里見三男教授の微生物学教室に補手として気楽な出入りを許された頃からまったく自然に発生した。とくに一年下級の新入学生だった大阪薬専卒の鈴木元造君と知りあい、土曜日の午後などには鈴木君とふたりして京大皮膚科研究室に小笠原登講師を訪ねたり、大阪外島療養所に桜井方策博士や所長村田正太先生を訪ねたりして私も癩学会の会員となった。癩菌に対するこれら先輩のイメージを感得させられたこととともに、梅毒村田反応抗原の創製に、村田正太博士は療養所内に起居されて、正常人血清もコレステロール抗原と沈降反応を現すので、動物心臓アルコール抽出エキスを防御膠原液（シュブコロイド）として適宜に添加することによって、梅毒や癩患者血清とのみ反応する診断液を調製される原理に従って夏休み中には完成することができたことは、嬉しい感銘であった。

後日外島療養所は大風水害のために破滅し、高松市外大島青松園として移転改築、私も毎年夏休みのはじめ学生たちを引率して慰問、見学、研修を兼ね年中行事とし、後年優れた所員や所長を輩出した実績は、若い青年医達の精進の功であった。僅か一泊二日の青松園研修ではあったが、思わぬ奇縁にも恵まれ徳島大学眼科の三井幸彦教授と枕を並べた一泊の翌朝、大講堂で三井教授のトラコーマウイルス把握の研究講話に浴した感激は、学生たちとともに忘れ得ないもので、三

井教授が癩患者の眼科治療に示された情熱と脱毛睫毛移植技術にも敬仰した余韻はいまも心に響いている。

また私は青松園講堂で結核菌R→S変異の生態について話し、野島泰治園長のS型結核菌癩病原説にも永年つき合った想い出は尽きないが、村田正太、桜井方策、小笠原登、野島泰治の諸星先輩は相次いで他界され、若かりし鈴木元造君まで戦禍と痼疾の不幸に逢い急逝せられたことは、まことに寂しく愛惜の極みである。

また癩患者の苦しむ熱コブ（SLE）の本態究明も学生たちとともに興味を湧かせ、私は局所シュワルツマン・サナレリ型反応の原理から浮腫因子の観点を加えて検討を進め基礎を深めた想い出もある。私を杏林温故会に誘ってくれた恩人の鈴木元造君のあまりに短かった人生は惜しみてもあまりあるが、彼は家に所有した福沢諭吉筆の詩軸を惜しまず適塾に寄贈し、適塾の床の間にいつでも眺めることができるのは彼の公的精神の発露であって、深甚の敬意と感謝を捧げるのは私ひとりではない。



適々豈唯風月のみならんや渺茫たる
塵界自ら天真世情説くを休めよ
意の如くならずと
無意の人は乃ち如意の人

（適塾所蔵）

また鈴木元造君自身が遺した医史学的原著は、まったく不如意の短い人生の中で仏典医籍の綿密な調査をへて医学生時代に書いたもので、いまなお光を放っている。しかし知る者ぞ知るのみの学友会誌上に、昭和四年高槻の田舎に建ったばかりの新校舎内で、私ども学生有志の自治で編集刊行した小誌『仁泉』に記録されたままで広く世に知られる由もなく、くわえ戦時中に廃刊になったもので、私は故鈴木君の追善供養の意味を兼ねて医史学会員のために改めて復刻したい念願

である。

題名は「本邦癩病史上における南蛮流外科の祖・伊留満（イルマン） Luis de Almeida」（『仁泉』第七号、大阪高等医学専門学校仁泉会編集部、一九三六）および「奈良、北山十八間戸創立に関しての一考察、附、一遍上人の癩救済事蹟」（同）という二論文である。

もうひとつ他に「カスパル流外科に関する研究」の論文があったはずであるが記録の所在が不明になっている。また当時医学生の私どもが学内に医学会を創立して春秋二回の集談会を開き、その第二回（昭和八年一月二十六日）鈴木元造の演題「古医書に見る大楓子」、第七回（昭和十一年五月二十三日）「癩病の異名」、第十一回（昭和十三年五月十五日）「本邦狂犬病史」の三題が記録され自己抄録が残っている。

これらも前の二題とともに復刻再刊に供する。

私は里見、戸田両教授、大原八郎博士の因縁から野兎病との付きあいを生涯に結び、その本態究明の研究班のひとりに加わり、自発的に自己人体実験をされた大原リキ夫人、長男嘗一郎博士、佐藤久蔵、桂重次、川喜田愛郎、北村四郎、星島啓一郎、桜井信夫、三輪清三博士その他多数の諸学友と交わり、多大の啓発を受けた鴻恩は忘れ得ない。さらに私は野兎病研究の奥の院詣でと自認しつつ、食兎中毒、兎毒の国内初の記載者本間棗軒の人物に魅せられて、水戸、小川、潮来を訪ね、桂岸寺、長勝寺、長国寺、天聖寺、根本寺、大儀寺に墓碑、句碑、碑文縁起を読み、拓本を採り、その心を探り、自準亭や稽医館の核心に迫った。また石島弘博士をはじめ故井坂教、柳沢美代志、菅波達次郎、故伊藤英雄博士、故原和久博士の案内誘導の感銘は深い。水戸学の人脈とその心は水戸歴代藩主、安積澹泊、佐々宗淳、森儼塾、藤田東湖、小宮山楓軒、青山延于等の人格と原南陽、本間玄琢、玄調と禅譲の素晴らしい家系を溯り、道悦は戸田藩士として天草四郎島原の乱に先鋒として従軍、竹槍に突かれて右脚を失い、有馬に湯治して医の道に進み、俳号を松江と称して松尾芭蕉と親交が生じ、芭蕉は猶子（甥）桃印を伴って伊賀上野から江戸に出て深川に庵を結び、句友の杉山杉風等の温い友情の

中に貧しい生活を耐え、桃印は癆瘵で斃れ、内縁の妻寿貞尼も幼女二人とともに早逝し、芭蕉は本草経を読んで医薬を学び、貞享三年四月十二日起請文を認めて、本間道悦に医師免許を得ている。それはまったく自分の用で旅のためでもあったろう。元禄二年五月、奥の細道長路の旅に出たが、当時まったく知る由もなかった野兎病流行地域を奥の細道に重ね合せて、曽良とともに歩いた紀行文の中に兎毒感染のなきや危惧する迄もないが、「雉兎蒭蕘の行きかふ道そことも分かず……」と野兎も棲み、ダニもいたはずで「蚤虱馬の尿する枕元」もさぞかし寝床では痒かったに違いないし、湯殿山では曽良も涙を流して「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」にはある種の医学的な憶測さえはさみたい気がする。羽黒鶴が岡城下では医師渕庵不玉の家に宿しているが、鼠の関を越えた市振の関では「この間九日、暑湿の労に神を悩まし、病おこりて事をしるさず」と書いて「文月や六日も常の夜には似ず」の句がある。特定することは不可能であるが、夏風邪か、野兎病か、結核か、考えるほど色々と病名も浮んでくる奥の細道ではある。「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」辞世の銘句にも少しの惚けも感じない五十一年の精進された生涯で、家族周辺の癆瘵早逝の既往歴にも耐えられたことを讃えたい。蕉翁は本間道悦（俳号松江）と親戚つきあいの間柄で、鹿島紀行は自準亭において認め、旧友の仏頂禅師を激励に訪ねた鹿島詣での後、大洋村阿玉の大儀寺に雨後の清き月見を果して句境も冴え、詩を残し、天聖寺の本間家墓地内に親筆の句碑が原南陽の撰文で建てられている。また宝光山大儀寺の翁堂縁起の碑文の中に自準亭と芭蕉および仏頂禅師の関係を記し、句碑百基の盛況にも協力し、毎年春秋二回全国の句友たちと多数集い、山主山上宗俊老師、宇野沢竹童、金原石碌その他の宗匠たちと計って自準賞を設定し地域文化の向上に資して発展している。

昔から自準亭を訪ねた文人墨客は数多いが、小林一茶もそのひとりで「したたはしや昔しのぶの翁椀」の句を残し、自準亭で世話になった汁椀の一個は弥宜の眞彦が貰い受けて日向に帰り権現山に翁神社を祠って御神体にした。（詳細は拙著「翁神社縁起」『義仲寺誌』一八三～一八六号、昭和五十七年、参照）

私は医史学を通じて、古人、先哲、先師の面影と人格や心に触れて親しみと喜びを与えられる恩は、感謝し切れないほ

ど大きく、また無限の宝庫でもある大きな過去の故事は、求めさえすれば、何処にでも未検討不消化のまま残されており、現在に持ち出して改めて再消化し哲学することこそ後進者我々の任務でもある。

すなわち先師、先哲、硯学、医聖たちの真摯な格物致知、活物窮理の努力は現代医科学的医療の肥料であり、足場を照す示唆照鑑でもある。

C・W・フーフェランドも、宗教心なき医療は罪悪にもなるという実情から、大医王（釈迦）、医王（薬師）、神農、キリストの聖書経典はインダス・サラセン文化にも深く連なって、人の道や健康法を培い、医食同源、火食の法は養生訓、衛生保健の源泉をたたえている。

論語にもいう「志於道、拠於徳、依於仁、遊於芸」と人間性を豊かに自覚しておごらず、謙虚に真理の喜ぶところを喜び頒ちあう生活と医療を一如たらしめる理念を押し進めたいものと念ずる。したがって私は医史学との因縁において、左手に聖典経文を持ち、医学の総括的概念として服膺し、右手の科学的良智と研精した技能をそれぞれ各論的各個別に活用すべく、友情豊かな学友たちと切磋琢磨の日夜を楽しみ、感謝しつつこの求められた項の禿筆を擱く。

（日本医史学会評議員）